

勸善懲惡

織田作之助

青空文庫

ざまあ見ろ。

可哀相に到頭落ちぶれてしまったね。報いが来たんだよ。良い
気味だ。

この寒空に縮ちぢみの単衣ひとえをそれも念入りに二枚も着込んで、……二
円貸してくれ。見れば、お前じゃないか。……声まで顫ふるえて、な
るほど一枚ではさぞ寒かろうと、おれも月並みに同情したが、し
かし、同じ顫えるなら、単衣の二枚重ねなどという余り聴いたこ
とのないおかしげな真似は、よしたらどうだ。……それに、二円

貸せとは、あれは一体なんだ？ 同じことなら、二千円貸せ……と、大きく出るんだね。だいいち、その方がお前らしいよ。

もともとヤマコで売っていたお前の、そんな惨めな姿を見ては、いかな此のおれだって、涙のひとつも……いや、出なんだ。出るもんか。……随分落ちぶれたもんですね、川那子^{かわなご}さん、ざまあ見ろ。ああ、良い気味だ……と、嗤^{わら}ってやった。驚きもしなんだ。なに、驚くもんか。判っていたんだ。こう成るとは、ちゃんと見通していたのだ。

良いか。言つてやるぞ。……お前から手を引いた時、おれは既にお前の「今日ある」を予想していたのだ。だからこそ、手を引いた。お前の方では、おれを追い出してやったと、思っているら

しいが、違う。おれの方から見限つたのだ。……あいつはもう駄目だと、愛想を尽かしたのだ。いまに落ちぶれやがるだろうと胸をわくわくさせて、この見通しの当るのを、待っていたのだ。案の定当つた。ざまあ見ろ。

ところで、いま、おれが使つた此の「今日ある」という言葉を、お前は随分気に入つて、全国支店長総会なんかで、やたらに振りまわしていたね。そんな時、お前は自分ひとりの力で、「今日ある」をもたらしたような口利いていたが、聴いていて、おれは心外……いや、おかしかつた。なにが、お前ひとりの力で……。いまとなつては、いかな強情なお前も認めるだろうが、みなおれの力だつた……。例えば、支店長募集のあの思いつきにしろ、新聞

広告にしろ、たいていの智慧はみな此のおれの……。まあ、だんだんに、聴かせてやろう。

二

いつだったか、……。いや、覚えている、六年前のことだ、……。「川那子丹造の真相をあばく」という、題名からして、お前の度胆を抜くような本が、出版された。

忘れもせぬ、……。お前も忘れてはおるまい、……。青いクロース背に黒文字で書名を入れた百四十八頁の、一頁ごとに誤植が二つ三つあるという薄っぺらい、薄汚い本で、……。本当のこともいく

らか書いてあつたが、……いや、それ故に一層お前は狼狽ろうばいして、
莫迦ばかげた金と人手を使つて、その本の買い占めに躍起となつた。

むかし新聞屋（……というより外に適当な言葉も見当らぬが、
お望みならば、新聞社の社長と言いかえても良い……）をしてい
た頃、さんざ他人の攻撃をして来た自分が、こんどは他人より手
ひどく攻撃されるという、廻合せの皮肉さに、すこしは苦笑する
余裕があつても良かりそんなものなのに、お前はそんな余裕は耳
搔きですくう程も無く、すっかり逆上してしまつて、自身まで出
向いて、市中の書店を駈けずりまわり、古本屋まで買い漁あさつたと
いうじゃないか。

思えば、氣の小さい、そんな男のことなどをあばいた本など、

たいして売れもしなかつただろうと、おれは思っていたが案に違つて、誇張めいた言い方をすると、瞬く間に版を重ねて、十六版も出たという。お前は知るまいが、初版は千五百部で以後五百部ずつ版を重ねたのだ。

「——なぜ、こんな本が売れるのでしよう？」

と、出版屋も不思議がつたくらいだが、不思議でもなんでもない。お前が買うから売れたのだ。出る尻から本が無くなるので、出版屋は首をひねりながら、ともかく増刷していたのだ。増刷の本が出ると、またお前が買い占める。出版屋はまた増刷する。…この売りと買いの勝負は、むろんお前の負けで、買い占めた本をはがして、包紙にする訳にも思えば参らず、さすがのお前もほ

とほと困って挙句に考えついたのが「川那子丹造美談集」の自費出版。

しかし、これはおかしい程売れず、結果、学校、官庁、団体への大量寄贈でお茶を濁すなど、うわべは体裁よかったが、思えば、醜態だったね。だいいち、褒めるより、けなす方が易しいので、文章からして「真相をあばく」の方が、いくらか下品にしろ、妙味があった。話の序でだから、この一部をそこへ挿むことにしよう。

——もともと出鱈目でたらめと駄法螺だぼらをもつて、信条としている彼の言ゆえ、信ずるに足りないが、その言うところによれば、彼の祖父は代々鎗やり一筋の家柄で、備前岡山の城主水野侯に仕えていた。

彼の五代の祖、川那子満右衛門の代にこんなことがあつた……。当時満右衛門は大阪在勤で、蔵屋敷の留守居をしていた。蔵元から藩の入用金を借り入れることが役目である。

ところが、ある年の暮、いよいよ押し詰まつて来たのにかかわらず、蔵元町人の平野屋ではなんのかんのかんと言って、一向に用達してくれない。年内に江戸表へ送金せねば、家中かちゆう一同年も越せぬというありさま故、満右衛門はほとほと困つて、平野屋の手代へ、品々追従賄賂して、頼み込んだが、聞き入れようとせず、挙句に何を言うかときけば、

「——頼み方が悪いから、用達出来ぬ」
との挨拶だつた。

「——これは異なることを承る。拙者の頼み様がよろしからずとは、何をもつて左様申されるか」

と、満右衛門が詰め寄ると、

「——貴方は、御主人の大切な用を頼むのに、手をお下げにならん。普通なら、両手を爾しかと突いて、額を下げた頼むところでしょうがな……」

と言われた。途端に、満右衛門は頭を畳に付けて、

「——田舎者の粗忽許して下され」

と、煮えくりかえる胸まで畳につけんばかりに、あやまった。

すると相手は、

「——暫く其の儘ままで……」

と、満右衛門の天窓あたまの上で咳などをして、そして、言うことは、

「これで頼み方がお判りでしょうがな」

「——はア」

満右衛門は真赧まっかになって、畳にしがみついていた。

「——ははは……。頼み方を教えて、大切な金を貸すというのは、世間には類の無いことじゃ。しかし、貴方はとも角も、御主人は見捨て難い故、まあ、お貸ししましょう。頭をお上げになって、よろしい」

満右衛門は頭を上げた咄嗟とっさに、相手を討ち果たして、腹を切ろうと思った。が、いや、差しかかった主人の用向が大切だ、また

おれの一命はこんなところで果すべきものではないと、思いかえして、堪忍をこらし、無事に其の時の用を弁じて間もなく退役し、自ら禄を離れて、住所を広島に移して斗籌を手にする身となつた……。

それより三世、即ち彼の祖父に至る間は相当の資産をもち、商を営み農を兼ね些かの不自由もなく安楽に世を渡つて来たが、彼の父新助の代となるや、時勢の変遷に遭遇し、種々の業を営んだが、事ごとに志と違い、徐々に産を失うて、一男七子が相続いで生れたあとをうけ、慶応三年六月十七日、第九番目の末子として、彼川那子丹造なかしが生れた頃は、赤貧洗うが如きであつた。

新助は仲仕なかしを働き、丹造もまた物心つくといきなり父の挽ひく荷

車の後押しをさせられたが、新助はある時何思ったか、丹造に、祖先の満右衛門のことを語ってきかせた。

兄妹の誰もがまだ知らなかったこの話を、とくにえらんで末子の自分に語ってくれた父の心を想って、丹造は何か発奮し、祖先は金のためにまたとない恥をかけた。よし、このおれは……と、荷車の押す手に、思い掛けない力が籠って、父親の新助がおどろくくらいだった。

十六歳の時、丹造は広島をあとにして、立身出世の夢を宿毎に重ねて、大阪の土を踏んだ。時に明治十五年であった。

すぐに道修町どしよまちの薬種問屋へ雇われたが、無気力な奉公づとめに嫌気がさして、当時大阪で羽振りを利かしていた政商五代友厚

の弘成館へ、書生に使うてくれと伝^{つて}手を求めて頼みこんだ。

五代は丹造のきよときよとした、眼付きの野卑な顔を見て、途端に使わぬ肚をきめたが、八回無駄足を踏ませた挙句、五時間待たせた手前もあつて、二言三言口を利用してやる気になり、

「——お前の志望はいったい何だ？」

と、きくと丹造はすかさず、

「——わしや金持ちになりたい」

と答えた。

「——そうか。それなら他所^{よそ}へ行くが良かろう。おれはいま百万円の借金がある。この借金は死ぬまで返せまい。そんなおれに、金持ちになる道が教えられると思うのか。うはははは……」

笑いやんで、五代は、

「――帰れ」

と、言った。

丹造はその後転々奉公先をかえたが、どこでも尻が温らず、二十歳の時には何とかの罪で罰金七円、二十一の時には罰金十円をくらった。

それで何となく大阪に住みにくく、丹造は東京へ走った。職を求めて東京市中を三日さまよう内に、僅かな所持金もなくなり、本郷台町のとある薄汚いしもたやの軒に、神道研究の看板が掛つているのを見て、神道研究とはどういうものかわからなかったが、兎も角も転がり込んだ時は、書生にしてくれと、頼む泣声も出な

かつたほど、あわれに飢え疲れていた。

広島訛なまりに大阪弁のまじった言葉つきを囓わらわれながら、そこで三月、やがて自由党の壮士の群れに投じて、川上音次郎、伊藤痴遊等の演説行に加わり、各地を遍歴した……と、こう言うと、体裁は良いが、本当は巡業の人足に雇われたのであって、うだつの上がる見込みは諦めた方が早かつたから、半年ばかり巡業についてまわつたあげく、到頭飛び出して大阪へ舞い戻つた。

断り無しに持つて来た荷物を売りはらつた金で、人力車を一台購かい、長袖はつぴの法被なかももひきに長股引まんじゆうがき、黒い鰻頭笠まじゆうがきといういでたちで、南地溝の側の俵夫しやふの溜り場へのこのこ現まわれると、そこは朦朧もうろう俵夫しやふの巢で、たちまち丹造の眼はひかり、彼等の気風に染まる

のに何の造作も要らなかつた。

田舎出の客を見ると、五銭で大阪名所を案内してやる……と、寄つて行く。そして、市中をガラガラ引き廻しながら、あやしげな名所案内の説明をやり、宿屋へ送りこむと、名所の説明代は一カ所五銭だ、六十カ所説明してやったから三円くれと、凄むのである。折柄、悪いところへガチャガチャ巡査ガが通り掛つても、丹造はひるまず折合つたところで、一円以下ではなかなかけりをつけなかつた。当時、溝の側から貝塚まで乗せて三十六銭が相場で、九十銭くれれば高野山まで走る俵夫もざらにいた。

しかし、間もなく朦朧俵夫の取締規則が出来て、溝の側の溜場にも屢々《しばしば》お手入れがあつてみると、さすがに丹造も

居たたまれず、暫らくまごまごした末、大阪日報のお抱え俵夫となった。殊勝な顔で玄関にうづくまり、言葉つきもにわかにかまつて丁寧だったが、それが存外似合つた。

一年ばかり、その記者衆を乗せて、出先と社の玄関を往復している間に、彼等の内幕やコツをすっかり覚えこんでしまったある雨の日、急に丹造の野心はもくもくと動きだして、よし、おれも一番記者になつて……と、雨に敲かれた眼にきつと光を見せたが、しかし、お抱え俵夫から一足飛びに記者になろうというのは、町医者づきの俵夫が医者になろうというのと同然、とてもものことに見込みはなかつたから、いつそのこと、自身新聞社を経営してやろうと、丹造は本気で思い、この想いを毎日ガラガラ走らせて

いた。

横堀筋^{すじかい}違橋^{せんば}ほとりの餅屋の二階を月三円で借り、そこを発行所として船場新聞というあやしい新聞をだしたのは、それから一年後のことであつた。俵夫三年の間にちびちび溜めて来たというもの、もとより小資本で、発行部数も僅か三百、初号から三号までは、無料で配り、四号目には、もう印刷屋への払いが出来なかつた。のみならず、いかに門前の俵夫だつたとはいえ、殆んど無学文盲の丹造の独力では、記事の体裁も成りがたくて、広告もとれず、たちまち経営難に陥つた。そこを助けたのが、丹造今日の大を成すに与つて力のあつた古座谷^{こざたに}某である。古座谷はかつて最高学府に学び、上^{シャンハイ}海にも遊び、筆^{ひっけん}硯を以つて生活をした

こともある人物で、当時は土佐堀の某所でささやかな印刷業を営んでいた……。

まず無難な書き方だ。あとでどう辛辣しんらつに変わろうとも、また、そうでなくては「あばく」ことにもならないわけだが、ここらあたりまでは、お前も辛抱できるだろう。もつとも、二つの罰金刑を素つ破抜かれた点は、いくらか痛かろうが……。

嘘も無さそうだ。いや、一個所だけある。古座谷某が最高学府に学んだ云々うんぬんはあれは真赤な嘘だ。最高学府なんぞ出たからとて、べつだん自慢にも、世渡りのたしにも、……ことに今になつては……ならぬ故、どうでもよいことだが、しかし、まあ誤謬ごびゆうだけは正して置こう。実は、おれは中等学校へは二三年通つたこ

とはあるが、それ以上の学問は、少なくとも学校と名のつくところでは、やらなかつた。当のおれが言うのだから、間違いはなかるまい。

いや、そんなことは、どうでもよい。それよりも、「丹造今日の大を成すに与つて……」云々と、ちゃんとおれの力を認めている点、これが問題だ。いま引いた文章にも書いてある通り、おれとお前の関係はこの船場新聞にはじまって以後いわば蔭になり日向なたになり、おれはお前を助けて来たのだ。早い話が、この時もしおれが居なければ、あの新聞は四号で潰つぶれていたところだ。当時お前も、

「——古座谷さん、この恩は一生忘れませんぞ」

と、どな呶鳴るように言っていたくらい、随分尽してやったものだ。印刷は無論ただ同然で引き受けてやったし、記事もおれが昔取った杵きねづか柄で書いてやった。なお「蘆のめばえ咲分娘」と題して、船場娘の美人投票を募集するなど、変なことを考えついたのも、おれだった。これは随分当って、新聞は飛ぶように売れ、有料広告主もだんだん増えた。

もつとも、こう言ったからとて、べつだん恩に着せようというのではない。それに、もともとこの船場新聞ではお前もたいして得るところはなかつた。そののみか、某事件の摘発、攻撃の筆がたたって、新聞条令違反となり、発売禁止はもとより、百円の罰金をくらった。続いて、某銀行内部の中傷記事が原因して罰金三

十円、この後もそんなことが屢 あつて、結局お前は元も子もな
くしてしまい無論廃刊した。

お前は随分苦り切つて、そんな羽目になつた原因のおれの記事
をぶつぶつ恨みおかしいくらいだったから、思わずにやにやして
いると、お前は、

「あんたという人は、えげつない人ですなあ」
と、呆れていた。

「——まあ、そう言うな。潰してしまつても、もともとたいした
新聞じゃなかつたんだから……」

と、笑つてみると、お前は暫らくおれの顔を見つめていたが、
何思つたか、いきなり、

「——冗談言うと、撲なぐりませうぞ」

と、言つて出て行き、それきりおれのところへ顔出しもしなかつたが、それから大分経つて、損害賠償だといつて、五十円請求して来た。

その手紙を見るなり、おれは、こともあろうに損害賠償とはなんだ、折角これまで尽して来てやつたのに……と、直ぐ呶鳴り込んでやろうと思つたが、莫迦ばか莫迦ばかしいから、よした。実際、腹が立つというより、おかしかつたのだ。五十円とはどこから割り出した勘定だろうと一寸考えて、なるほど、罰金の額から、印刷費の残りを引いたのが五十円だなとわかると、おれは正直な話、噴きだしたくらいだ。阿呆らしくて、怒りも出来なかつたのだ。そ

れに、おれの方にも、案外呶鳴り込みに行けない弱味があつた。と、いうのは外でもない。何も廃刊させようと思つて、あんな危い記事を書いたわけではないが、しかし、ひそかにお前の失脚を希^{ねが}う気持ちがなかつたとは、言えなかつたからだ。だから、廃刊になつてみるとざまあ見ると、おれは些か良い気持だつたのだ。

何故、そんな気持を抱いたのか。今だからこそ白状するが、原因はお千鶴だ。と、こう言えば、お前はびつくりするだろうが、当時おれもまだ三十七歳、若かつた、惚れていたのだ。

ところが、この博^{ばくろ}勞^{ろう}町の金^{こん}米^{べい}糖^{とう}屋の娘は余程馬鹿な娘で、相手もあろうにお前のものになつてしまった。それも蓼^た食^たう虫が好いて、ひよんなまちがいからお前に惚れたとか言うのなら、ま

だしも、れいの美人投票で、あんたを一等にしてやるからというお前の甘言に、うかうか乗ってしまったのだ……と、判った時は、おれは随分口惜しかった。情けなかった。

あとからは知らず、最初お千鶴はお前になんか一寸も惚れていなかったのだ。その証拠に……と言うのは、ひどく理詰めな言い方だが、お千鶴はおれに惚れていたのだ。いや、少なくとも、おれはそううぬぼれていた。その眼付きが証拠だと信じていた。もつともお千鶴は美人は美人にしろ、一等には少し無理かと思えるほどの^{すがめ}眇眼で、本当はおれの思いちがいだったかも知れないが、とにかくお前よりはおれの方が好かれていたことだけは、たしかだ。

それを、お前に、いやな言い方をすると、横取りされてしまったのだ。それもほかの理由でならともかく、おれが、大阪弁で言うと、「阿呆あほうの細工に」考えだした美人投票が餌になったのだから、いつてみれば、おれは呆れ果てたお人善し、上海まで行き、支那人仲間にもいくらか顔を知られたというおれが、せつせつと金米糖の包紙を安い単価で印刷してやっていたことなぞ、自分でも忘れてしまいたいくらい、情けなく恥かしかつた。

普通なら、嫉妬の余り、お前の顔を見るのもいやだと、それきり手を切ってしまうところを、そうしなかつたのも、ひとつには、そんな気持を見すかされるのを怖れたからなのだ。いや、見すかさるる云々は第二段、そんな大人気ない自分自身を恥じたからな

のだ。

けれど、さすがにおれは、おれのおかげで……と言つても、そんな言い過ぎではあるまい——お千鶴をわがものにして、船場新聞の社長で収まり込んでいるお前を見ると、こいつ、良い気になりやがつて、いっぺん失脚させてやったら、どんな顔をするだろうか、とひそかに思わぬこともなかつたのだ……。

どうだ？ 驚いたか。恐れ入ったか。お人善しだとお前が思つていたおれの肚はらの中は、こんな風だったのだ。それを、損害賠償の請求とは、相手を知らぬ可愛い振舞いを、お前もしたものでないか。普通、恩を知っている者なら、そんな五十円の賠償金なぞ請求できぬところを、そうしたのは、余程おれを甘く見たの

だろうが、そうはおれは甘く出来ていなかった。いや、ただ甘く見たのではあるまい。それがお前の流儀なのだ。ちよつと余人では真似の出来ない神経なのだ。凶太いというのもちよつと違う。つまりは、一種気が小さい方かも知れない。ともかく、滑稽こっけいだった。勿論おれはそんな請求には応じなかった。黙って放つて置くと、それきりお前はうんともすんとも言つて来なかった。

三

船場新聞を廃刊してしまうと、お前はすっかり文無しで、たちまち暮しに困った。どうするかと見ていると、お千鶴は家で手内

職、お前はもと通り俵をひいて出て、まるで新派劇の舞台が廻ったみたいだった。

当時、安堂寺橋に巡航船の乗場があり、日本橋まで乗せて二銭五厘で客を呼んでいたが、お前はその乗場に頑張つて、巡航船へ乗る客を、俵の方へ横取りしようと、金切声で呶鳴っていた。巡航船に赤い旗がついているのを見て、お前も薄汚れた俵にそれと似た旗をつけて、景気をつけたものの、客は正直で、同じ二銭五厘で乗る分にはと、やはり速い巡航船の方をえらんだ……とわかつた途端に、お前は流しの方へ逆戻つた。が、何分取締りがきびしくて、朦朧もうろうも許されず、浮かぬ顔をして、一里八銭見当の俵を走らせていたらしかつたが、さすがにいつまでもそんなことを

している気のなかつた証拠には、……ここらあたり、「真相をあ
ばく」も存外誤植がすくない故、手間を略はぶいて、そのまま借用さ
せてもらうと、——

ある日、玉造で拾つた客を寺町の無量寺まで送つて行くと、門
の入口に二列に人が並んでいた。ひよいと中を覗くと、それが本
堂まで続いていたので、何と派手な葬式だが、いったいどの何
家の葬式かと、訊いてみると、

「——阿呆らしい。葬式とちがいまつせ。今日はあんた、灸きゆうの日
だんがな」

と、嗤わらわれた。が、丹造は苦笑もせず、そして、だんだん訊く

と、二、三、四、六、七の日は灸の日で、この日は無量寺の紋日だつせ、なんし、ここの灸と来たら……途端に想いだしたのは、当時丹造が住んでいた高津四番丁の飴屋あめやの路地のはいり口に、ひつそりひとり二階借りしていたおかね婆さんのことだ。

名前はおかねだが、彼女はおから以外の食物を買うて帰つたためしがないというくらい、貧乏していた。界限の娘に安い月謝で三味線を教えてくらししていたがきこえて来るのは、年中、「高い山から谷底見れば」ばかり、つまりは、弟子が永續きしないのだつた。それというのも、新しい弟子が来ると、誰彼の見境いもなしに灸をすえてやろうと、執拗しつこく持ちかけるからで、病氣ならともかく、若い娘の身で、むやみに灸の跡をつけられてはたまつた

ものではないと、たいていの娘は「高い山から」をすまさぬうちに、逃げてしまふのだつた。おかね婆さんは昔灸婆をしていたこともあり、弟子を掴まえてそんな風に執拗く灸をすすめるのも、月謝のほかに十銭、二十銭余分の金を灸代として取りたい胸算用だから……と、専らの評判をいつか丹造もきき知っていたのである。

その日、路地へ帰ると、丹造は早速おかね婆さんを掴まえて、

「——実はおまはんを見込んで、頼みがある」

かねもうかねもう金儲けだときかさされると、途端におかね婆さんは齒ぐきを出

して、にこにこし、つまりは何の造作もなく説き伏せられてしまった。

だが、さて、どんな風に実行に移したのかという段になると、丹造にはからきし智慧もなく、あくまで相棒が要った。いいかえれば、再び古座谷某の智慧が必要だった……。

あきれた。いや、正直なところ、以前のことなぞ忘れた顔で、よくもぬけぬけおれのところへやって来られたものだど、さすがのおれもあきれた。が、それよりも、

「——ひとつ社会奉仕をしてみようと思うんですよ」

と、いけ酒蛙しやあしやあ酒蛙と言ったのには、一層あきれてしまった。

何が社会奉仕なもんか。いつてみれば、施せきゆう灸巡業で一儲けし

ようというだけの話じゃないか。一里八錢の俵よりも、三里の灸錢の方がぼろい……と言え、済むところを、社会奉仕とは、ど

こを押せば、そんな音が出るのだと、おれはおかしかったが、そういうおれもおれで、話をきくなり、

「——よし、来た」

と、ひどく弾んで、承諾してしまったのだから、世話はない。

普通なら、横面のひとつも撲りつけてから、

「——お前のような奴の片棒をかつぐのは、もう御免だよ」

と、断るところだ。それを、そんな風にあっさり引き受けてしまったのは、欲から出たことだ……と、思われたくない。事実またそんな気はなかった。

いかにおれの精神が腐っていたからといって、まさか恋敵のお前を利用して、金銭欲を満足させようなどとは、思いも寄らぬ、

実はそれと反対、恋敵のお前に儲けさせてやりたい気持だった。この気持はそのまま、お千鶴に貧乏の苦勞をさせたくないという、われながらいじらしい気持と通ずる。と、こう言い切ってしまうと、簡単でわかりやすく、殊勝でもあり、大向うの受けは良いのだが無論それもある。が、それだけでは、新派めいて、気が引ける。ありていに言うと、ひとつにはおれの弥次馬根性がそうさせたのだ。施灸の巡業ときいて、

「——面白い」

と思ったのだ。巡業そのものに、そして、そんなことを思いつくお前という人間に、興味を感じたのだ。お前のような人間に：
：つまりは、腐れ縁といった方が早い。

「社会奉仕」というからには、あくまで善は急ぐべしと、早速おかね婆さんを連れて、三人で南河内の狭山へ出掛けた。

寺院に掛け合つて、断られたので、商人宿の一番広い部屋を二つ借り受け、襖を外して、ぶつ通しの広間をつくり、それを会場にした。それから、「仁寄せ」に掛つた。

「仁寄せ」などと言えば、香具師めくが、やはりここはあくまでこの言葉でなくてはならぬ。それほど、なにからなにまで香具師の流儀だったのだ。

だいいち、服装からして違う。随分凝つたもんだ。一行三人いずれも白い帷子かたびらを着て、おまけに背中には「南無妙法蓮華なむみょうほうれんげきよ經」の七字を躍らすなど、われながらあやしい装立ちだった。

が、それで気がさすどころか、存外糞度胸ができてしまつて、まるで村芝居にでも出るようなはしやぎ方だつた。

お前もおれも何思つたか無精髭ぶしようひげを剃そり、いつもより短く綺麗きれいに散髪していた。お前の顔も散髪すると存外見られると思つたのは、実にこの時だ。

おれは変にうれしくなつてしまい、「日本一の靈れいきゆう灸きゆう！ 人ダスケ！ どんな病気もなおして見せる。▽▽旅館へ来タレ」とチラシの字にも力がこもつた。チラシが出来上がると、お前はそれを持つてまわり、村のあちこちに貼りつけた。そして散髪屋、雑貨屋、銭湯、居酒屋など人の集まるところの家族には、あらかじめ無料ですえてやり、仁の集まるのを待ち構えた。

もし、はやらなければ、宿賃の払いも心細い……と、口には出さなかつたが、ぎろりとした眼を見張つてから一刻、ひよいと会場の窓から村道の方を覗くと、三々伍々ぞろぞろ歩いて来る連中の姿が眼にはいり、あ、宣伝が利いたらしいとむしろ狼狽ろうばいした。「——婆さん頼んだぜ」

と、すぐさまおれは「受付」の机のうしろに坐り、そして、来た順に並ばせていちいち住所、氏名、年齢、病名をきいて帖面へ控えた。一見どうでもよいことのようにだったが、これが妙に曰くありげで、なかなか莫迦ばかに出来ぬ思いつきだった。

お前はおかね婆さんの助手で、もぐさをひねつたり、線香に火をつけて婆さんに渡したり、時々、

「——はいッ！」

と、おかしげな気合を掛けたり、しまいには数珠じゆずを揉んで、

「——南無妙法蓮華経！」

と、唱えて見たり、必要以上にきりきり舞いをしていたが、ふと見ると、お前は鉢巻をしていた。おれはふつと噴きだし、折角こつちが勿体ぶっているのに、鉢巻とはあんまり軽々し過ぎる、だいいち帷子との釣合いがとれないではないかと、これはすぐやめさせた。

面白いほどはやり、婆さんははばかりに立つ暇もないとこぼしたので、儲けの分を増してやることにして埋め合せをつけるなど、気をつかいながら、狭山で四日過し、

「——こんな眼のまわる仕事は、年寄りには無茶や。わてはやっぱし大阪で三味線ひいている方がよろしいおますわ」

と言う婆さんを拝み倒して、村から村へ巡業を続け、やがて紀州の湯崎温泉へ行つた。

温泉場のことゆえ病人も多く、はやりそうな気配が見えたので、一回二十銭の料金を三十銭に値上げしたが、それでも結構患者が集まつた。

「——どうです？ 古座谷さん、この繁昌はやりようは、実際わしの思いつきには……」

さすがに驚きはしたが、しかし、何といても、繁昌つた原因は、おれの宣伝のやり方が堂に入っていたからだ。

いかにおれが宣伝の才にめぐまれていたかは、いずれ後ほど詳しく述べる故、ここでは簡単に止めて置くが、たとえば湯崎へ来た最初の日集まった患者のなかで口の軽そうな、話好きそうな婆さんを見ると、

「——この灸は天下一の名灸ではあるが、真実効をあらわそうと思えば、たった一つ守って貰わねばならぬことがある。いや、いや、こういうったからって、何もむつかしいことじゃない。灸をすえて三十分後にすぐ温泉に浸り、そして十三時間湯殿から一步も出ず、灸の穴へひつきりなしに湯気をあてて置けば良いのだ。これをむつかしい言葉で言うると温泉灸療法という……。いや、言葉はどうでもよい。わかったね。十三時間温泉にいるんですよ」

温灸という言葉ならあるが、温泉灸療法とは変な言葉だと、われながら噴きだしたくなるのをこらえこらえ、おごそかに言い渡したものだ。

病人というものはいったいに正直なものだが、おまけに年寄りで、広告にひきつけられて灸をしに来るというからには、まかりまちがっても、おれの言葉をあやしむことはあるまい。いそいそとして、長風呂にはいり、退屈まぎれに、湯殿へやって来る浴客を掴まえては、世間話、その話の序では、どこそこでよく効く灸をやっている、日蓮宗の施灸奉仕で、ありがたいことだ、げんにわたしもいま先……と、灸の話が出ることは必定……と、可哀想に長風呂でのぼせてしまう迷惑も考えずに、おれも随分罪な宣

伝をやったものだが、これがまた莫迦に当たつたのだ。

前後一週間のうちにいくら儲けたか、いま記憶はないが、大阪に残して来たお千鶴のもとへ、お前がひそかに為替をくんで送金してやったことだけは、さすがのこいつもお千鶴のことは気になると見える、存外殊勝なもんだと、その時感心しただけに、今もおぼえている。もつとも、その金は「売上げ」（とお前は言つていた、つまり収入だ）のなかから、内緒でくすねていたものらしいと、あとでわかつた時は、興冷めしたが……。

とにかく、儲かつた。お前は有頂天になり、

「もうおかね婆さんさえしつかり掴まえて置けば一財産出来ませ

ぞ」

と、変に凄んだ声でおれに言い言いし、働きすぎて腰が抜けそうにだるいと言う婆さんの足腰を湯殿の中で揉んでやったり、晩食には酒の一本も振舞つてやつたりして鄭重ていちょうに扱っていたが、湯崎へ来てから丁度五日目、

「——ほんまに腰が抜けてしもた」

と、婆さんは寝ついてしまった。

あわてて按摩あんまを雇つたり、見よう見真似の灸をすえてやつたりしたが、追つ付かず、「どんな病気もなおして見せる」という看板の手前、恥かしい想いをしながらこつそり医者をよんで診せると、

「——こりや、神経痛ですよ。まあ、ゆつくり温泉に浸って、養

生しなさい。温泉灸療法でもやることですか」

と、知っていたのか、簡単に皮肉られて、うろたえ、まる三日間二人掛りで看病してやったが、実は到頭中風になってしまっていた婆さんの腰が、立ち直りそうにもなかった。

「——これもと言うたら、あんたらがわてをこき使うたためや」と、おかね婆さんは大分怪しくなつて来た口調でぼそぼそやくし、宿や医者への支払いは嵩む一方だし、それに、婆さんに寝込まれているのは「医者の不養生」以上に世間にも恰好がわるい話だと、おれは随分くさってしまったが、お前ときてはおれ以上、「——もう、こうなつては、宿の客ひきをするか、どろんをきめるか、どちらかですか」

と、何ともいいようのない顔で苦り切っていた。

宿の客ひきもどろんも、どちらもいずれ劣らずお前らしくて似合っている、おれはおかしかったが、しかし、まさか婆さんの中風がなおるまで客ひきをするほど殊勝なお前でもあるまいと、ひそかに考えていたところ、案の定、ある日、

「——うさばらしに田辺で遊んで来ますよ」

と、そわそわ出掛けて行つたきり、宿へ戻つて来なかつた。

蒸気船の汽笛の音をきいた途端に、逐電しやがったとわかり、薄情にもほどがあると、すぐあとを追うて、たたきのめしてくれようと、一旦は起ち上がったが、まさか婆さんを置き去りにするわけにもいかず、折柄、

「——古座谷はん、濟まへんけど、ししきしたつとくなはれんか」と、情けない声をだした婆さんの方にかまけて、思い止まり、背中にまわっていつもお前がしてやっていたように、存外思い臆の下を抱え起し、尿をとってやった。ごつごつした身体だった。

それから、四五日も看病してやっつたろうか、いよいよ宿や医者への支払いにさし迫られたので、たまりかねて婆さんを背負つて、つなしらず綱不知から田辺へわたり、そこから船で大阪へ舞い戻るまで、随分おれは情けない目を見た。みなお前のせいだ。

四

高津の裏長屋の二階へ歸つて四日目におかね婆さんは、息をひきとつた。

身寄りの者もないらしく、また、むかしの旦那だと名乗つて出る物好きもなく葬儀万端、二三の三味線の弟子と長屋の人たちの手を借りて、おれがしてやった。長屋の住人の筈のお前は、その時既にどこやら姿をくらましていた。

ひとにきけば、湯崎より逃げかえつた翌日、お千鶴と一緒に、夜逃げしてしまったということだった。ここらあたりから急に悪趣味になつて来た「真相をあばく」の時代がかつた文章を借りていうと、

——さて、お千鶴を道連れに夜逃げをきめこんだ丹造は、流れて故国の月をあとに見ながら、朝鮮の釜山に着いた。

馴れぬ風土の寒風はひとしおすらいの身に沁み渡り、うたたひにく脾肉たんの歎たに耐えないのであったが、これも身から出た錆さびと思えば、らくはく落魄の身の誰を怨なまん者もなく、なんきんむし南京虫と虱しらみに悩まされ、濁酒と唐辛子を舐なめずりながら、おんどる温突から温突へと放浪した。

しかし、空拳と無芸では更に成すべき術もなく、寒山日暮れてなお遠く、徒らに五里霧中に迷い尽した挙句、実姉が大邱に在るを倅い、これを訪ね身の振り方を相談した途端に、姉の亭主に、三百円の無心をされた。姉夫婦も貧乏のどん底だった。

「百円はおろか五円の金もおまへんわ」

と、わざと大阪弁をつかつて、ありていに断ると、姉の亭主は、「——そうか、そりや、残念だ。ここに百円あれば、ぼろい話があるんだが……」

と、いかにもがっかりした顔だった。釣られて、

「——では、何かうまい話でも……?」

と、きくと、実は砂金の鉱区が売物に出ているという。銀主を見つけて、採取するのもよし、転売しても十倍の値にはなるとの話に、丹造の眼はみるみる光り泪一つこぼさず、三味線の心得あるを倅い、お千鶴をしかるべきところへ働きに出した。そして砂金の鉱区を買ったが……。

写していて、よくもまあ、お前という人間のいやらしさにうつつつけの文章だと、あきれられるくらいだが、さて、そうやって砂金の鉱区を買ったものの、ここでも未だ運は向かなかつたらしい。

お前が大阪から姿を消してしまつてから二年ばかり経つたある日、御霊神社みたまの前を歩いていると、薄汚い男がチラシをくれようとした。

どうせ文楽の広告ビラだろうくらいに思い、懐ふところ手を出すのも面倒くさく、そのまま行き過ぎようとして、ひよいと顔を見ると、平べつたい貧相な輪郭へもつて来て、頬骨だけがいやに高く張り、ぎよろぎよろ目玉をひかせているところはぎらに見受けられる顔ではない——すぐお前だとわかつた。倭小な体たい軀を心も

ち猫背にかがめているのも、二年前と変らぬお前の癖だった。

「こいつ奴！」

と、思わず出掛った言葉に代る「よう！」という声をいつしよにあわててチラシをうけとつたが、それは見ずに、

「どうしてたんだい？ 妙なところで会うね」

チラシ撒きなんぞに落ちぶれてしまったかと、匂わせながら言うと、案外恥じた容子も見せずに、酒蛙しやあしやあと、

「——いや、どうもすつかり御無沙汰しまして……。いつぞやは、飛んだ御迷惑を……」

と、それで、湯崎の一件を済して置いて、言葉が続け、

「——実は、あれから、朝鮮へ行つて、砂金に手を出したりしま

したんですが、一杯くわされましてな、到頭食いつめて、またこちらへ舞い戻って来ました」

「——そりや大変だったね」

と鷹揚おうように湯崎でのことは忘れたような顔をして、

「それで、なには どうして んだね？ 今でも やっぱし……」

お前と一緒にいるのかと、わざとぼんやりきくと、お前は直ぐお千鶴のことだと察し、

「ああ、——あいつですか。朝鮮に残して来ました。これをしてますよ」

三味線をもつ真似をしてみせ、けろりとしていた。

「——なるほどね」

と、おれも平気な顔をしていた筈だが、果してどうか。実は内心唸うなっていたのだ。が、いつまでもお千鶴のことを立ち話にきくのも変だと、すぐ話をかえて、

「——ところで、お前の方は、いまどうしているんだい？」
と、きくと、

「——薬屋をしているんです」

「——へえ？」

驚いた顔へぐつと寄って来て、

「——それもあんた、自家製の特効薬でしてね。わたしが調整してるんですよ」

「——そいつア、また。……ものによっては、一服寄進にあずか

つてもよいが、いったい何に効くんかい？」

「——肺病です。……あきれたでしょうがな」

「——あきれた」

かつて灸婆をつかつて病人相手の商売に味をしめた経験から、割り出していることだろうと、思わず微笑させられたが、同時にあきれもした。

むかし道修町の薬問屋に奉公していたことがあるというし、また、調合の方は朝鮮の姉が肺をわずらって最寄りの医者を書いてもらっていた^{しよほうせん}処方箋を、そっくりそのまま真似てつくったときくからは、一応うなずけもしたが、それにしてもそれだけの見聞でひとかどの薬剤師になりすまし、いきなり薬屋開業とは、さす

がにお前だと、暫らく感嘆していた。

それと、もうひとつあきれたのは、お前の何ともいえぬ薄汚い恰好、そして自身でその薬の広告チラシを配っていることだった。が、この事情は「真相をあばく」に詳しい。

——朝鮮を食い詰めて、お千鶴を花街に残したまま、再び大阪へ舞い戻つて来た丹造は、妙なヒントから、肺病自家薬の製造発売を思い立ち、どう工面して持つて来たのか、なけなしの金をはたいて、河原町に九尺二間の小さな店を借り入れ、朝鮮の医者が書いた処方箋をたよりに、垢^{あか}だらけの手で、そら豆のような莫迦に大きな、不^ぶ恰^か好^{こう}な丸薬を揉^もみだした。

そして、肺病とはこんな大きな玉を頬ばらねばならぬものかと、患者が迷惑するだろうなどは考えず、如何にすればこれが売れるだろうか、ただもうそればかり頭をひねった。薬の原価代を払ったあと、殆んど無一文の状態で、今日つくった丸薬を今日売らねば、食うに困るといふありさまだった。

新聞広告代など財布を叩き破つても出るわけはなく、看板をあげるにもチラシを印刷するにもまったく金の出どころはない。万策つきて考え出したのが手刷りだ。

辛うじて木版と半紙を算段して、五十枚か百枚ずつ竹の皮ですつては、チラシを手刷りした。が、人夫を雇う金もない。已むなく自ら出向いて、御霊神社あたりの繁華な場所に立って一枚一

枚通行人に配った。そして、いちはやく馳^はせ戻り、店に坐つて、客の来るのを待ち受けるのだつた。しかし、たいして繁昌^{はや}りもしなかつた……。

繁昌らぬのも道理だ。家伝薬だというわけではなし、名前が通つていふというわけでもなし、正直なところ効くか効かぬかわからぬような素人手製の丸薬を、裏長屋同然の場所で売つていて誰が買いに来るものか。

無論、お前もそのことは百も承知してか、ともかく宣伝が第一だと、嘘八百の文句を並べたチラシを配るなど、まあ勢一杯に努めていたというわけだが、そのチラシ自体がわるかつた。

おれもお前に貰つて、見たが、版がわるい上に、紙も子供の手習いにも使えぬ粗末なもので、むろん黒の一色刷り、浪花節なにわぶしの寄席の広告ひろめでも、もう少し気の利いたのを使うと思われようない代物だった。余程熱心に読まねば判読しがたい、という点も勘定に入れて、全くのところ、まるで薬の信用をみずから落しているのも同然だった。

おまけに、丸薬をしかるべく包装するわけでもなく、夜店で売る「一つまけとけ」の飴玉みたいに、白い菓子袋に入れて、……
それでは売れぬのも無理はなかった。

そんな情けない状態ゆえ、その時お前がおれに出会ったのは、
いわば地獄に仏全くお前にとっては、運の神だといってもよい

らいだった。

知つての通り、まずおれはお手のものの活版で、二色刷りの凝つたチラシをつくつてやった。次に包装だ。箱など当時としては随分思いついたハイカラな意匠で体裁だけでいえば、どこの葉にもひけをとらぬ斬新なものだった。なお、大阪市内だけだが、新聞に三行広告も出してやった。

無論、全部おれが身錢を切つてしてやったことで、なるほどあとの返しはそれ相当に受け取りはしたが、当時はなにもそれを当てにしていたわけではない。簡単にいえば親切づく、——あとで儲けを山分けなどというけちな根性からではさらになかった。

何ごとも算盤そろばんずくめのお前には、そんなおれの親切が腑に落

ちかねて、済みません、済みません、一生恩に着ますなんて、泪をこぼさんばかりにしながらも、内心は、こいつどこまで親切な奴だろうと、いくらか呆れていたろう。いや、それに違いあるまい。全くの話、おれ自身にしても、なぜそんなに親切にしてやったのか、はつきりとは判らなかつたくらいだ。

朝鮮の花街に残して来たというお千鶴のことをきけば、どうにも不憫ふびんで、ここでお前に一儲けさせてやれば、お前もお千鶴を迎えに行くだろう——という気持は無論あつた。が、何度も言うようだが、それだけの気持からではない。俗に惚ほれこむというあの気持だつた。いや、そういえば、たしかにお前にはひとに惚れこませるだけのものはあつた。少なくとも、おれのような人間に：

∴。

例えば、お抱え車夫からいきなり新聞を経営するなど、既にただの人間ではない——と思つていたところ、果して施せきゆう灸巡業を思いついたり、どこかへ姿をくらましてしまつたと思つていると、いつの間にか、九尺二間の店ながら、製薬の本舗に収まつている。ちよつと、普通の人間に出来る芸当ではないと、その凶々しいとおうか。たくま逞しいとおうか、人並みはずれた実行力におれは惚れこんだのだ。

それに、貧相な面ながら、けいけいたる光を放っているあの眼、ただ世渡りをする男ではないと、おれには興味ふかい眼付きだつた。むぎむぎ見捨てるには惜しい男だと、見込んだのだ。ちつぱ

けな怒りはすべて忘れて……。

昔、政党がさかんだった頃、自身は閣僚になる意志はてんで無く、ただ、誰かこいつと見込んだ男を大臣にするために、しきりに権謀術策をもちい、暗中飛躍をした男がいたが、良い例ではなけれども、まず、おれの気持もそんなとこだったろうか。

もつとも、チラシや包装がそれだとは言わぬ。敢えてその権謀術策を挙げよというなら、間もなくおれが智慧をしぼって考えだした支店長募集など、そのひとつだろう。例によって「真相をあらばく」を引用しよう。

——馴れぬ手つきで揉みだした手製の丸薬ではあったが、まさか歯磨粉を胃腸薬に化けさせたほどのイカサマ薬でもなく、ちやんと処方箋を参考にして作ったもの故、どうかすると、効目があったという者も出て来た。市内新聞の隅っこに三行広告も見うけられ、だんだんに売れだした。売れてみると、薬九層倍以上だ。

たちまち丹造の欲がふくれて、肺病特效薬のほか胃散、痔の薬、かっけ脚気良薬、かりゆうびよう花柳病特效薬、目薬など、あらゆる種類の薬の製造を思い立った。いわば、あれでいけなければこれで来いと、あやしげな処方箋をたよりに、日本中の病人ひとり余さず客に見せる覚悟をころころと調合したのである。

間もなく河原町の裏長屋同然の店をひき払って、霞町附近に

「川那子メジシン全国総発売元」の看板を掛けた。同じヤマコを張るなら、高目に張る方がよいと、つい鼻の先の通天閣を横目に仰いで、二階建ての屋根の上にはばかに大きく高く揚げたのだ。

そのように体裁だけはどうか整ったが、しかし、道修町の薬種問屋には大分借りが出来、いや、その看板の代金にしたところ
で……。そんな状態ではいくら総発売元と大きく出しても、何程の薬をこしらえてみても、……。しかも、その薬にしたところで、そろそろ警戒しだした問屋からは原料がはいらず、「全国」どころか、店での小売りにも間に合いかねた。

そこで、考えた丹造は資金調達の手段として、支店長募集の広

告を全国の新聞に出した。

「妻子養うに十分の収益あり」という甘い文句の見出しで、店舗の家賃、電灯・水道代は本舗より支弁し、薬は委託でいくらでも送る。しかも、すべて卓効疑いのない請合薬で、卸値は四掛けゆえ十円売って六円の儲けがある。なお、売れても売れなくても、必ず四十円の固定給は支給する云々うんぬんの条件に、申し分がなく、郵便屋がこぼすくらい照会の封書や葉書が来た。

早速丹造は返事を出して曰く、——御申込みにより、貴殿を川那子商会支店長に任命する。ついては身元保証金として、金六百円を納められたい。——活版刷りの美麗な辞令だった。

そして、待機していると、世間は広いものだ。一生妻子を養う

ことが出来れば、六百円の保証金も安いものだど胸算用してか、大阪、京都、神戸をはじめ、東は水戸から西は鹿児島まで、ざつと三十人ばかりの申し込みがあつた。なけなしの金をはたいたのか、無理算段したのかいずれにしてもあまり余つた金ではない証拠に、為替に添えた手紙には、いずれも血の出るような金を手ばなす時の表情がありありと見え、どうぞよろしくと、簡単な文句にも十二分の想いがこもっていた。やつと五百円だけ工面しました。残金百円はあと十日以内に何とかして送金します故、何とぞ支店長に任命のほどを……と、あわれなまでにあわてて送金して来た向きもあつた。

そうして集まつた金が一万八千円ばかり、これで資金も十分出

来たど、丹造は思わずにやりとしたが、すぐ渋い顔になると、

「——まだちよつと足りぬ」

気味のわるい声で呟いた。

「……いつそのこと、保証金を八百円にすればよかつた」

と、丹造は頭をひねつた。間もなく、彼は三十軒の支店長へ手紙をだして曰く、——支店の成績をあげるためには、それ相当に店舗を飾る必要がある。この意味に於いて、総発売元は各支店へ戸棚二個、けやき櫺吊看板二枚、紙張横額二枚、きんぴょうぶ金屏風半双を送付する。よつて、その実費として、二百円送金すべし。その代り、百円分の薬を無代進呈する。

……いきなり二百円を請求された支店長たちは、まるで水を浴

びた想いに青く濡れた。六百円の保証金をつくるのさえ、精一杯だったのだ。それを、この上どこを叩いて二百円の金を出せというのか。しかし、出さねば、折角の保証金がフイになるかも知れない——と、むろん、そうはつきりと凄文句でおどしつけたわけではなかったが、彼等はそんな心配をした。

それに、考えてみれば、無理は無理でも、装飾品のほかに百円の薬がただで貰えるというのだ。けっして割のわるい話ではない——と、結局、彼等は乾いた雑巾ぞうきんを絞るようにして、二百円の金を工面せざるを得なかった。

その結果集まった金が六千円、うち装飾品の実費一軒あたり七十円に無代進呈の薬の実費が十円すなわち三十軒分で二千四百円

をひいたぎつと四千円が、丹造の懐ろに流れ込んだ。さきの保証金とあわせて二万二千元、但し新聞広告代にぎつと三千元掛り、差し引き一万九千円の金がいったと、丹造は算盤をはじいた：
…。

嘘みたいな上首尾だった。こうまで巧く成功するのは、お前：
：いや、このおれも予想しなかった。たいていのことに驚かぬおれだが、この時ばかりは、自分でも嫌気がさすくらいだった。

無論、これはおれだけの気持、お前と来ては、一万九千円を抱いて、うろろう狼狽するほどの喜び方だった。「渋い顔」なぞと書いているが、違う。あれは言葉の綾あやで、他の時は知らず、この

時ばかりは、お前の渋い顔なぞいっぺんも見たことはない。

序でに言つて置くが、この「渋い顔」という言葉に限らず、少なくともこのあたり「真相をあばく」の筆者は重大な手落ちをやっている。この支店長募集をすべてお前の頭からひねり出したように書いているが、また、そうして置く方が、お前の真相をあばく効果を強めることにもなるわけだろうが、むろんここへはおれの名を書きそえるところだった。いや、もつと正確を期するならば一切合財おれが下図を描いたものとすべきだった。

そんな手落ちはあつたが、その代り（といつてはおかしいが）それに続く一節は、筆者の脚色力はさきの事実の見落しを補つて余りあるほど逞しく、筆勢もにわかには鋭い。

——口に蜜ある者は腹に劍を蔵する。一人分八百円ずつ、取るものは取ったが、しかし、果して新聞の広告文通り約束を履行したかどうか。

なるほど、最初の一月は一提の薬と、固定給四十円を交付したが、その後は口実を構えて補給薬も固定給も送らない。家賃、電灯代も忘れた顔をしていたのだ。

そんな風に扱われては、支店長たちも自然自滅のほかはないと、切羽つまった抗議の手紙を殆んど連日書き送ったが、さらに効目はない。やっと返事が来たかと思うと、請求したくば、売り上げをもっと挙げてからにしろという文面だ。

そして、いきなり店員を遣って、支店長の外出中を襲わしめ、

大事の商売を留守にして、外出とは何ごとか。それで支店長の責任が果せると思うのか。そんなありさまだから、成績があがらぬのだと、不意に逆ねじをくわせる。なお、売上台帳を調べて、難癖をつけるのだ。

例えば、背に腹はかえられず、困窮のあまり、つい台帳をごまかしたり、売上金を費消（——といつても、その中から固定給や家賃を無断借用しているだけのことだが、形式上は費消だ）しているのを発見すると、もうそれだけで、十分齷^{かくしゆ}首の口実にも保証金没収の理由にもなるのだった。

こうして、追っ払われた支店長は二三に止まらず、しかも、悪^あ辣^{くらつ}なる丹造は、その跡釜へ新たに保証金を入れた応募者を据え

るといふ巧妙な手段で、いよいよ私腹を肥やしたから、路頭に迷う支店長らの怨嗟えんさの声は、当然高まつた。

ある支店長のごときは、旅費をどう工面したのか、わざわざ静岡から出て来て、殆んど発狂同然の状態で霞町の総発売元へあばれ込み、丹造の顔を見た途端に、昂奮のあまり、鼻血を出して、「川那子！ この血を啜すすれ！ この血を。おれの血の最後の一滴まで啜らせてやるぞ！」

と、呶鳴つた。

もともと臆病な丹造は、支店長の顔を見るなりぶるぶるふるえていたが、鼻血を見るが早いか、あつと叫んで、小柄の一徳、相手の股をくぐるようにして、跣足はだしのまま逃げてしまい、二日居所

をくらましていた……。

ここに到つて「真相をあばく」もいよいよそれらしくなつて来たが、同時に嘘めいて見える。事実また嘘だった。ことに鼻血のくだりなど、さすがにお前の臆病な性質を見抜いているという取得があるにせよ、誰が読んでも嘘だとわかる。また、保証金没収の一件にしても、そうだ。

一万九千円を握つただけで能事足れりとするような、けちな肚ならともかく、いくら何でも、そんな非合法な、かつ信用に関するような真似は、お前がやりたくても、おれがやらなかつた。

そんな悪辣な手段ばかり弄ろうさなかつた証拠には、第一期の（な

どといえ、語るに落ちるが）支店長で、後に川那子メジシンの首脳部に収まった連中が随分あつた筈だ。もつとも、淘汰した者も全然ないわけではなく、たとえば、売上げ金費消の歴然たる者は、罪状明白なりとして馘首、最初の契約どおり保証金は没収した。

しかし、これとても全然はなからの計画ではなく、冷酷といつてしまえばそれまでだが、敢えて「あばく」に足るほどのことでもなかつた。同じ「あばく」なら、書き洩らしたところに、もつと効果的な材料があつた筈だ。

すなわち、成績のわるい支店の鼻の先に、何の前触れもなしに、いきなり総発売元の直営店を設置したのがそれだ。大阪でいうな

らば、難波の前に千日前、堂島の前に京町堀、天満の前に天神橋といつたあんばいに、随所に直営店をつくり、子飼いの店員をその主任にした。

支店と直営店とは、だいいち店の構えからして違って、直営店に客が集まるのは当然のこと、支店の自滅策としてこれ以上の効果的な方法はなかったと、いまもおれは己惚れている。しかしこれも弁解すれば、結果から見てのこと、何も計画的に支店をつぶす肚ではなかった。

あつて邪魔になるわけでもない支店をつぶすために、わざわざ直営店をつくるにも当たらないとは、常識で判断してもわかることで、いうまでもなく直営店はより多く薬を売るための手段、いわ

ば全くの営業政策にほかならなかつたのだ。

同時にまた、こうも言えるだろう。全国に多くの支店を擁しながら、なおかつ直営店の経営に乗り出すほど、事業は盛大になって来ていた——と。事実、支店の数も何もむやみにつぶしたわけでない証拠に、第一期の募集当時にくらべると、三倍にも増えていたのだ。無論、そのような盛大を来たすには、それ相当の歳月と、苦心がなければならぬ筈だった。効目が卓^{すく}れていたから、薬がよく売れた、——そんな莫^ば迦^かげたことは、お前も言うまい。

——凡^{およ}そ何が醜悪だと言っても、川那子メジシン新聞広告ほど、醜悪なものはまたとあるまい。

丹造は新聞広告には金目を惜しまず、全国大小五十の新聞を利用して、さかんに広告を行った。一頁大の川那子メジシンの広告がどこかの新聞に出ていない日は一日としてなかつたくらいだ。しかも、単に彪大であるばかりでなく、そのあくどさに於いて、古今東西それに匹敵するものは一つとしてない。

まず、彼は売薬業者の眼のかたきである医者征伐を標^{ひょうぼう}榜し、これに全力を傾注した。「眼中仁なき悪徳医師」「誤診と投薬」「薬価二十倍」「医者^{でんぱしゃ}は病気の伝播者」「車代の不可解」「現代医界の悪風潮」「只眼中金あるのみ」などとこれをちよつと変

えれば、そのまま川那子メジシンに適用できるような題目の下に、冒頭からいきなり——現代の医者は鬼である。彼等は金かね儲もけうのためには義理人情もない云々と書き立て、——それに比べると川那子丹造鑑製の薬は……と、ごたくを並べ、甚しきは医者に鬼の如き角を生やした諷刺画ふうしがまで掲載し、なお、飽き足らずに「売薬業者は嘘つきの凝結」などと、同業者にまで八つ当った……。

こうして写して、さすがのおれも気恥かしいくらいだ。というのは、お前も知つての通り、この新聞広告はれいによつておれの案だったから。

無論、新聞に広告を出すほどのことを、なにもおれの案だなど

と断るまでもないことだし、また、べつだんおれの智慧を借りなくても誰にも思いつけることだが、しかし、あんなに大胆に、殆んど向う見ずかと思えるくらいには、やはりおれでなくてはやれなかつたろう。費用にしろ、よくまあ使つたと思えるくらい、たとえばれいの一万九千円も、薬種問屋の払いに使つたのはそのうちの二割、あとは全部広告費に使つたのだ。二万、三万ではきかなかつた。

「——そんなに広告だして、どうするんです？　良い加減にしましょう」

「しまいにはお前も心配……いや、怒りでした。」

「——莫迦！　むかし新聞で食つていたこともあるというのに、

訳のわからぬことをいうな。三千円の広告費で一万九千円の保証金を掴んだ味を忘れたのか。三万円使っても、四万円はいれば文句はなからう」

その通りだった。良きにつけ、悪きにつけ、川那子メジシンの名は凡そ新聞を見るほどの人の記憶に、日に新たに強く止まったのだ。六百円の保証金を^{やが}聴て千五百円まで値上げしても、なお支店長応募者が陸続……は^{おおげさ}大袈裟だが、とにかくあとを絶たなかつた一事を以ってしてもわかるように、——むろん薬もおかしいほど売れた。

効いたから、売れたのではない。いうまでもなく、広告のおかげだ。殆んど紙面の美観を台なしにしてしまうほどの、彪大かつ

あくどい広告のおかげだ。もつとも年がら年中医者への攻撃ばかりやっていたわけではない。

そんな芸なしのおれではなかった。……

——その後、売薬規則の改備によつて、医師の誹謗ひぼうが禁じられると、こんどは肺病全快写真を毎日掲載して、何某博士、何某医院の投薬で治らなかつた病人が、川那子薬で全快した云々と書き立てた。世の人心を瞞まんちやく着やくすること、これに若くしものはない。何故か？ 曰く、全快写真は殆んど八百長である。

いったい丹造がこの写真広告を思いついたのは、肺病薬販売策として患者の礼状を発表している某寺院の巧妙な宣伝手段に狙い

をつけたことに始まり、これに百尺竿頭かんとう一步をすすめたのであるが、しかし、どう物色しても、川那子薬で全快したという者が見当らなかつた。

そこで、丹造は直営店の乾某がかつて呼吸器を痛めた経験があるを奇貨とし、主恩で縛りあげて、無理矢理に出鱈目でたらめの感謝状と写真を徴発した。これが大正十年、肺病全快広告としてあらわれた写真の嚆矢こうしである。

ついで、彼は全国の支店、直営店へ、肺病相談所の看板を揚げさせると同時に、全快写真を提供した支店、直営店に対しては、美人一人あたり二百円、多数の医師に治療を受けたる者二百円、普通百円の割にて報酬を与える旨、通告した。……

これだけ、引けば、良いだろう。これだけでも十分、八百長さ加減はわかる筈だ。詳しく知りたければ「真相をあばく」の百六十四頁から百七十五頁までを見てもらおう。十一頁にわたり、支店や直営店がいかにか巧妙に全快写真を探しあつめたかを、御丁寧に統計まであげて、素っ破ぬいている。

なお、同書百七十六頁から百七十九頁までには、全快写真の主が日ならずして、死んだとか、とくに死んでいる筈の病人が、どういう手落ちでか、百カ日当日の新聞広告の写真の上に生きかえつて、おかげで全快してこんな嬉しいことはない云々と喋しゃべつているとか、些かユーモア味のある素っ破抜きをしてあるが、まさか、

そんなことはなかつたろう。よしんば、あつたにしたところで、人の命というものは、明日をも知れぬもの、どうにでも弁解はつく、そう執拗しつように追究するほどのことはなからう。

しかし、とにかくこの広告は随分嫌われものだ。それだけにまた、宣伝という点では、これだけ効果的なものは、今もってちよつとほかに見当らないくらいだった。売れた。情けないほど売れたよ。

当時、まだそんな言葉は出来ていなかったと思うが、いわゆる知識階級——薬の効目などというものには全く懐疑的で、また、全快写真の八百長さ加減ぐらいは百も承知している筈の連中にして、たとえば、

「——実は、少々胸がわるいんだが、まだ川那子メジシンの厄介になるほどは、わるくないから安心だ」

ぐらいのことは言い、いよいよとなれば、飲む覚悟も気休めにしていたほどであつたから、一般大衆の川那子肺病薬に対する盲信と来たら、全くジフイレスのサルバルサンに於けるようなものだつた——と、言つて過言ではあるまい。病人にはつきり肺病だと知らせるのを怖れて、ひそかにレットルをとつて、川那子薬をのませたという話もあつた。

もつて、その人氣がわかる。みな、この広告のおかげ、つまりはおれの発案のおかげだつたではないか。それと、もうひとつこれもおれの智慧だが、同じ薬に上製と特製の二種類を設けたこと

が、非常に効果的だった。どうせ、中身はたいして変らぬのだが、特製といえ、なにか治りがはやいように思って、べらぼうに高^た価^かいののに、いや、高価いだけに、一層売れた。知らぬ間に、お前は巨万の金をこしらえていたのだ。

七

おれの目的、同時にお前の宿願はこうして遂に達せられたわけだが、さて、お前は巨万の金をかかえてどうするかと見ていると、簡単に俗臭紛々たる成金根性を発揮しだした。

上本町に豪壮な邸宅を構えて、一本一万三千円という木を植え

つけたのは良いとして、来る人来る人をその木の傍へ連れて行き、
「——こんな木でも、二万円もするんですからな、あはは……」
「——いつそ木の枝に『この木一万三千円也』と書いた札をぶら
下げて置くと良いだろう」

と、皮肉ってやると、お前はさすがにいやな顔をした。「諸事
儉約」「寄附一切御断り」などと門口に貼るよりも未だましたが、
たとえば旅行すると、赤帽に二十円、宿屋の番頭に三十円などと
呉れてやるのも、悪趣味だった。もつとも、これは大勢人の見て
いる時に限った。無論、妾も置いた。おれの知っている限りでは、
十七歳と三十二歳の二人、後者はお千鶴の従妹だった。

もとよりその頃は既に身うけされて、朝鮮の花街から呼び戻さ

れ、川那子家の御寮人で収まっていたお千鶴は、

「——ほかのことなら辛抱できまっけど、困うにこと欠いて、なにもわての従妹を……」

と、まるで、それがおれのせいかのようになり、おれに食って掛つた。随分迷惑な話だったから、

「——まあ、そう怒りなさんな。怒る方が損だよ。あんたも川那子がどんな男か知ってる筈だ。これが、普通の男なら、おれもあの女だけはよせと忠告するところだが、相手が川那子だから、言つても無駄だと思つて黙つていたんだよ」

とかなり手きびしく皮肉つてやったが、お千鶴は亭主のお前よりも、従妹にかんかんになつていたので、おれの言うことなど

耳にはいらず、それから二三日経つと、従妹のところへ、血相かえて怒鳴りこみに行つた。

口あらそいは勿論、相当はげしくつかみ合つた証拠には、今その帰りだといつて、おれの家へ自動車で乗りつけた時は、袖がひき千切れ、髪の毛は浅ましくばらばらだつた。眇眼すがめの眼もヒステリックに釣り上がつて、唇には血がにじんでいた。

「——これがおれの惚れていた女か」

と、そんなお千鶴の姿ににわかにおれはがっかりしたが、ふと連想したことがあつたので、

「——お千鶴さん、困るね。そんな恰好で来られては、だいいち、人に見られた場合、何とあやしまれても、弁解の仕様はあるまい

よ」

言っている内に、——今だから白状するが、——おれは突然変な気を起し、いきなり手を握ろうと、……想えば、莫迦莫迦しいことだった。その時、何故、そんな気を起したのか、その瞬間、お千鶴が大変醜く見えた。そのせいだったかも知れない。いや、それにちがいはあるまい。何故なら、これまでそうしようと思えば、随分機会があつたのに、あとにも先にもたつた一度、よりによつてその時だけ、そんな気になつたのだから……。

お千鶴はおどろいて、おれの手を振りはらい、

「——てんご転合しなはんな」

と、言つて、あわてて帰つて行つたが、むやみに尻を振り立て

たその後姿が一層醜く見え、もうそれはおれの変な気持をそそのかすのを通り越した、むくつけき感じだったから、以後、おれもそんな振舞いに出るようなことはなかった。

ところで、お前は妾のことをお千鶴に嗅ぎつけられても、一向平気で、それどころか、霞町の本舗でとくに容姿端麗の女事務員を募集し、それにも情けを掛けようとした。まず、手始めに広告取次社から貰った芝居の切符をひそかにかくれてやったり、女の身で必要もない葉巻を無理にハンドバックの中へ入れてやったり、機嫌をとっていた。

それを察した相手が、安全なうちにと、暇をいただきたい旨言
い出すと、お前は、

「——どうして、そんなこと言うんです。×子さん、何故、居て下さらんのか」

と、ぼろぼろ涙をこぼして、浅ましい。嘘の泪が本当とすれば、恐らく折角手折ろうとした花に逃げられる悲しさからだろうか。まさか、と思うが、しかし、存外、そんなところもあるお前だったかも知れない。

泣かれて、女事務員は辞職を思い止まった——というから、女というものほど当てにならぬものはない。

そんな風に、お前の行状は世間の眼にあまるくらいだったから、成金根性への嫉^{ねた}みも手伝つて、やがて「川那子メジシンの裏面を曝^{ばくろ}露する」などという記事が、新聞に掲載されだした。

勿論、大新聞は年に何万円かの広告料を貰っている手前、そんな記事はのせたくものせなかつたから、すべて広告を貰えない三流新聞に限られていたが、しかし、お前は狼狽した。

「——どうしましょう？」

そう言つて、おれの顔を見たその眼付きに、何故かおれはがっかりした。少しも冴えたところの無い、おどおどした眼付きだった。

かつて、船場新聞で相手構わず攻撃の陣を張っていた頃、どこかの用心棒が撲り込みに来たことがあつたが、その時お前は部屋の隅にじつと腕組みして、いくらか蒼ざめながら彼等をにらんでいた——あの眼付き、それと、御霊神社の前でチラシを配ってい

た時の、その必要もないのに、ひどく隙がなかったあの鋭く光った眼付きを想い出して、おれはこうも変わるものか、とむしろあきれ、お前をさげすんだ。

やっぱり、人間は金が出来てしまうと、駄目だと思つて、

「——どうしまししょうも、こうしまししょうも無いさ。放つて置け！——それとも、怖いのか」

たった一言、吐き捨てて、あと口を利かず、素知らぬ顔をしてやった。すると、またしても、心細げにちらと見上げたお前の眼付きの弱さ！

「——こうツと。何ぞ良い考えはないもんかな」

お前はしきりに首をひねっていたが、間もなく、川那子メジシ

ンの広告から全快写真の姿が消え、代って歴史上の英雄豪傑をはじめ、現代の政治家、実業家、文士、著名の俳優、芸者等、凡ゆる階級の代表的人物や、代表的時事問題の誹毀讒謗的文章ひきざんぼうがあらわれだした。

自身攻撃されるのを防ぐために、有名人を攻撃するという、いわば相手の武器をとって、これを逆用するにも似た、そんなやり口を見て、おれは、さすがに考えやがったと思ったが、しかし、その攻撃文に「国土川那子丹造」という署名があるのを見て、正直なところ涙が出た。

しかし、これも薬を売る手段とあれば、致し方あるまいと、おれは辛抱して見ていたが、やがて、その署名の活字がだんだん大

きくなつて行き、それにふさわしく、年中紋付き羽織に袴はかまを着用するようになった。そして、さまざまな売名行為に狂奔した。これによつて「真相をあばく」に詳しい。

——手をかえ、品をかえ、丹造が広告材料に使つた各種の売名行為のなかで、これだけはいくらか世のためになつたといえるのがあるとするれば、貧病者への無料施薬がそれであろう。しかし、それとて真に慈善の意志から出たものか、どうかは、疑わしい。

施薬をうけるものは、区役所、町村役場、警察の証明書をもつて出頭すべし、施薬と見舞金十円はそれぞれ区役所、町村役場、警察の手を通じて手交するという煩雑な手続きを必要とした魂胆

に就いては、しばらくおくとしても、あの仰々しい施薬広告はいつたいなんとしたことか。

この稿を草する間にも、彼はいかがわしい施薬結果を、全国の新聞紙上に広告した。即ち、それによると、過去四カ月の間に七十名の貧病者に無料施薬をしたというのである。全国数十万の肺患者のうち、僅か七十名（もつとも、引続きより以上の数に達するかも知れぬが）に施薬しただけのことを、鬼の首でもとつたようにでかでかと吹聴するのは、大袈裟だ。

いまその施薬の総額を見積ると、見舞金が七十人分七百円、薬が二千百円、原価にすれば印紙税共四百二十円、結局合計千二百円が実際に費った金額だ。ところが、この千二百円を施すのに、

丹造は幾万円の広告費を投じていることか、広告は最初の一回だけで十分だ。手前味噌の結果報告だけに方に近い広告費を投ずるとは、なんとしてみうなずけぬ……。

やられてるじゃないか。ちゃんと見抜かれてるじゃないか。いや、何もおれは今更お前の慈善行為にけちをつける気は、毛頭ない。目的はどうであれ、慈善は大いによろしい。広告費の何万円とかも国のためになるような方法で使ったら、一層よかったねなどと、この際言っても、もう追っ付くまい。ただ、おれはこれだけ言つて置きたい。おれはそんなお前が急にいやになつて来たのだ——と。

それまでおれは、お前の売名行為を薬を売るための宣伝とばかり思つて、黙つてみていたのだが、どうやらそうではなくなつたのに、憂鬱ゆううつになつてしまつたのだ。変に国士を気取つたりして、むしろ滑稽だつた。国士という言葉が泣く。

つまりは、お前は何としても名誉がほしかつたのだ。成金の縁者ごのみというが、金のつぎの野心は名誉と昔から相場はきまつている。そう思えば、べつだん不思議でもないわけだが、しかし、そうはつきりと眼の前で見せつけられると、やはりたまらないものだ。

ことに、お前のやつは、何かをびくびく怖れての所業だ。だから、一層おれはいやだつた。成金は金があるというだけで、十分

だ。それ以上、なにを望むというのか。金を儲けたという、すさまじい重圧の下で、じつと我慢してりや良いのだ。じたばたする必要はないのだ。金があつて苦しければ、そつくり国家へ献金すれば良いのだ。じたばたするのは、臆病だ。——おれはもう黙つて見ていられなかつた。いや、ますます黙つたのだ。

おれはお前を金持ちにしてやるために、随分かげになり、日向ひなたになり権謀術策も用いて来たが、その目的も達した以上、もはやおれの出る幕ではない、と思つたのだ。

おれはおれのしたいことだけを、して来たのだ。これ以上、何のすることがあろうか。それに、もはやそんな風になつたお前にいつまでも関り合つては、ろくなことはない。おれはお前に

金を掴まして置いて、さっさと逃げようと考えた。落語に出て来る狸みたい……。その機会はやがて来た。

——さすがのジャーナリズムもその非を悟ったか、川那子メジシンの誇大広告の掲載を拒絶するに至った……。

お前はすぐ紋附袴で新聞社へかけつけ、

「——広告部長を呼べ！」

そして広告部長が出て来ると、

「——おれの広告のどこがわるい？ お前なぞおれの一言で直ぐ臆首になるんだぞ。おれはお前の新聞に年に八万円払ってるんだ。

社長を呼べ！ 社長にここへ出ろと言え」

社長は面会を拒絶した。お前はすぐすぐ帰って、おれに相談した。おれは渋い顔で、

「——じゃ、早速その新聞を攻撃する文章を、広告にしてのせて貰うんだね」

れいの「川那子丹造の真相をあばく」が出たのは、それから間もなくだ。その時のお前の狼狽あわて方については、もう言った。

おれはその醜態にふきだし、そして、お前と絶縁した。お前はおれを失うのを悲しんでか、それとも、ほかの理由でか、声をあげて泣きながら、おれにくれるべき約束の慰労金を三分の一に値切った。もつともそれとても一生食うに困らぬくらいの額だった

が、おれはなんとなく気に入らず、一年経たぬうちに、その金をすっかり使ってしまった。株だ。ひとに儲けさせるのはうまいが、自身で儲けるぶんにはからきし駄目で、敢えて悪銭とはいわぬが、身につかなかつたわけだ。

一方お前は、おれに見はなされたのが運のつきだったか、世間もだんだんに相手にしなくなり、薬も売れなくなつた。もつとも肺病薬にしろ、もつと良い新薬が出て来たし、それに世間も伶俐になるし、あれやこれやで、これまで手をひろげた無理がたたつたのだ。

派手な新聞広告が出来なくなると、お前の名も世間では殆んど忘れてしまった——というほどでなくとも、たしかに影が薄くな

つて来た。すると、お前はもう一度世間をあつと言わせてやろうと、見込みもない沈没船引揚事業に有金をつぎこんだり、政党へ金を寄附したり、結局だんだん落目になって来たらしいと、はた目にも明らかだった。

それにしても、まさかおれと別れて五年目の今日、お前が二円の無心にやって来ようとは、——むろん、予想していた、見抜いていた——しかし、その来方が余り早すぎた。

八

もう年も年だが、それにしても、以前に比べて随分顔色がわる

かったじやないか。たちのわるい咳もしていたじやないか。いや、だからといって、肺をわるくしたのか、なんてそんな皮肉を言ってるのじやない。それに、もうお前は肺病薬を売ってるわけじやない。いまは、たった二円の金に困っているのだ。しかも、それを隠そうとはしない。情けない話だ。なぜ、川那子丹造らしく、二千円貸せと、大きく出ないのだ。

しかし、よしんばお前に二千円貸せといわれても、二千円はおろか、二円の金もおれには無かった。恥かしいが、本当のことだ。御覧の通り、医者はおろか、薬を買う金もないのだ。安い薬草などを煎^{せん}じてのんで、そのおいで豊の色がかわっているくらい——もう、わずらってから、永いことになるんだ。

結局お前は手ぶらですごくすぐ帰って行った。呼びかえして、

「——あれはどうしてる？」

と、お千鶴のことを訊ききたかったが、どうせ苦勞しているにちがいないと思うと、聴けばかえって辛くなるだろうと、よしした。お千鶴ももう年だ。なんとなく、あの灸婆のことが想い出されたりして、想えばお千鶴も可哀想な女だと、いまはもう色気なぞ抜きにして、しんから同情される。

しかし、お前も随分しよんぼりした後姿だったね。いかにも、寒そうな、その姿がいまおれの眼のうらに熱くちらついて、仕方がない。右肩下りは、昔からの癖だったね。——おれももう永くはあるまい。お前とどっちが早いかな。

想えば、お互いよからぬことをして来た報いが来たんだよ。今更手おくれたが、よからぬことは、するもんじやない。おれも近頃めつきり気が弱くなった。お前のように……。

実際、お前は気の弱い男だった。そんなに悪い男じやない。

「真相をあばく」に書いてあるような、しんからの悪^{あくらつ}辣な男ではない。おれが言うのだから、まちがいあるまい。何故なら、今だからこそ言つてやるが、あの「川那子丹造の真相をあばく」の筆者は、じつは此のおれだったのだ。だからこそ、あんなに詳しくあばくことも出来たのだ。文章も見てわかるだろう。

（「大阪文学」 昭和十七年九月号）

青空文庫情報

底本：「夫婦善哉」講談社文芸文庫、講談社

1999（平成11）年5月10日第1刷発行

2002（平成14）年10月25日第3刷発行

底本の親本：「織田作之助全集 第三卷」講談社

1970（昭和45）年4月

初出：「大阪文学」

1942（昭和17）年9月、10月

入力：桃沢まり

校正：松永正敏

2006年7月25日作成

2006年8月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

勸善懲惡

織田作之助

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>